

アマデウス通信

(制作・著作) 日本モーツァルト愛好会

〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂2-22-23

朝吹 英和 方

2019. 12. 20 No. 54

TEL&FAX 03-3725-7179



愛好会創立40周年に寄せて

K.425 朝吹 英和

《近く新たに「モーツァルト愛好会」を発足する予定です。会員相互の心のふれあい、音楽体験の深めあい、未知なるモーツァルト像の発見を目標に、月一回の例会を行います。演奏会（三ヵ月に一回予定）、レコードによる鑑賞、話し合い、楽曲分析など、内容のある聴き方をしたいと思っています。会費は月五百円位の予定。同好の方、結成にご参加下さい。》

「レコード芸術」誌1980年1月号の読者欄に投稿された桜田 斉氏（愛好会の発起人で代表幹事）の呼びかけに賛同して21名の方が集まって開催された第1回例会（1980年1月27日／目黒区民センター社会教育館）をもって日本モーツァルト愛好会が創立されました。昭和55年の創立以来、平成から令和と時代の変遷を経て2020年1月27日に創立40周年を迎える運びと相成りました。

創立当初はレコード鑑賞や会員発表などを中心として運営されていた例会ですが、第5回（1980年6月）では初めてコンサートの例会が「ヴァイオリン・ソナタの夕べ」と題して開催されました。更に第18回例会（1981年9月）では高橋英郎先生をお迎えし

ての講演会も開催され例会の内容も充実して来ました。

例会の開催場所も中野サンプラザ、新宿文化センター、山王オーディウム等が加わり、第123回例会（1990年3月）ではお茶の水のカザルスホール（1987年設立）が会場となり、爾来コンサートの例会の定番会場となりました。

その後、ルーテル市ヶ谷センター、津田ホール、日本青年館、明日館講堂等でも開催され、第354回例会（2009年4月）では光が丘美術館が会場として利用され、落ち着いた美術館のサロン風の雰囲気が好評で定番会場となり現在に至っています。また、美術館所有のオーストリア市政1000年記念に制作された世界限定12台のベーゼンドルファー特別モデルは例会に出演された演奏家に絶賛されています。

愛好会の創立以来、映画「アマデウス」（日本では1985年公開）、モーツァルト没後200年（1991年）、モーツァルト生誕250年（2006年）等モーツァルトに関する記念コンサートや催事も多く開催され、モーツァルトブームも起きました。そうした時代の流れの中で愛好会は創立以来毎月1回の例会を継続して参りました。（東日本大震災のため2011年3月例会は中止）

正に「継続は力なり」であると思います。また、節目の例会としてはモーツァルト生誕250年記念として「ミサ曲ハ短調」と「戴冠式ミサ曲」の上演（2006年1月）、創立30周年記念のコンサート（「劇場支配人」と声楽ガラ・コンサート／2010年1月）

等があり、創立40周年記念例会では『コジ・ファン・トゥッテ』の上演が控えています。(2020年1月)

歴代の代表各位や会員の皆様のモーツァルトに対する敬愛の情、思いの深さに裏打ちされて愛好会は発展を遂げて参りました。

「ツウでもツウでなくても楽しめる」、「出演者との交流を大切にする」(例会後の懇親会等)、「若手演奏家の支援」(若手演奏家シリーズの例会18回開催)、「愛好会ならではの特徴のある例会」等多彩でユニークな愛好会の活動、そして何よりもモーツァルトの音楽を通じて会員相互の親睦、交流が図られている事は40年の長きに亘って受け継がれて来た会員の皆様の熱意とご尽力・ご協力の賜物であると思います。

私は愛好会の会員として素晴らしいモーツァルトの音楽の数々に出逢えた幸せ、モーツァルトが切っ掛けとなった「ご縁」によって広がった会員や演奏家の皆様との交流の有難味を改めて痛感しております。

愛好会創立40周年の歴史の重みに思いを致し、「明るく楽しいモーツァルト愛好会」即ち「ATMのモーツァルト愛好会」の実現に向けて邁進したいと思いますので、引き続き会員の皆様のご協力を宜しくお願い申し上げます。



「ちょっとひとこと(皆様への御礼)」

K.332 飯島一文

愛好会の10月(1回目)の例会は、国立音大大学院のオペラ「ドン・ジョヴァンニ」。私が愛好会に入会した年の10月の例会も「ドン・ジョヴァンニ」だった。それ以降「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」と続き、一巡したわけだ。「入会して、もう3年も経ったのか。」と感慨深い。

美術が好きで自分でも絵を描く私は、3年前、光が丘美術館のHPで愛好会のことを知った。「CDを聞くだけでなく、やっぱり生演奏を聞かなくちゃ」と思って入会した。クラシック音楽には素人の私には、「ツウの方も、ツウでない方も楽しめる」という会の方針は嬉しかったし、例会の後の懇親会も、会員の皆様や、出演した演奏家の方とお話できるのが、大変な魅力だ。

いまだ(今後もずっと?)ツウではないものの、この3年間で随分得るものがあった。

例会では感動する演奏や興味深い講演に出会えた。ピアノでは、最近ではこの9月の澤辺明音さん・中山瞳さん、2017年4月の三輪郁さん、声楽では2018年6月の「深遠なるモーツァルトの魂を歌う」(小堀勇介さん・雨笠佳奈さん・久保山菜摘さん)、オーケストラでは2016年5月の東京シティ・フィル(交響曲第41番「ジュピター」など)、レクチャーコンサートでは2016年4月の小倉貴久子さん(「フォルテピアノとベーゼンドルファーの弾きくらべ」)、講演では2016年3月の茂木一衛先生(「モーツァルトの今ここに現れる聖」)、2019年2月の野本由紀夫先生(「モーツァルト最後の交響曲とベートーヴェン最初の交響曲」)などが印象に残った。

オペラは、愛好会に入会するまで接したことがなかったが、この会に入ってオペラの素晴らしさを知り、演奏会やDVDで楽しむようになった。こんなに感動するものなのだったら、40年前から聞いておくべきだった。

若い頃、家内とたまに行った演奏会は…御茶ノ水のカザルスホールにピノックを聞きに行った時は、大雨でズボンがびしょ濡れになったが、演奏はとても良かった…長い間行っていなかったが、今ではまた行くようになった。家にあるCDも2倍ぐらいに増えたと、NHKの「クラシック音楽館」や「らららクラシック」なども見るようになった。

もしモーツァルト愛好会に出会わなかった

ら、モーツァルトを愛する皆様の姿に刺激を受けなかったら、自分一人では絶対このような変化はなかったと断言できる。会の活動は、演奏家選定、出演交渉、演奏会場や懇親会場手配、会計、会報作成など、会の皆様の大変なご努力の上に成り立っており、深く感謝し、御礼を申し上げたい。

しかし、この3年間で体調が悪化し、体調がすぐれない時には（事前に予想がつかない）、例会や懇親会に出席できない状態になってきた。これからは、できる範囲で、無理せずに参加していきたいと思う。

最後に一つお願い。
昨年の「私の好きなモーツァルト・ベスト10」のアンケート結果は大変興味深かったが、モーツァルトを愛する会員の方は、モーツァルト以外では、だれの、どんな曲がお好きなのか、知りたい。懇親会では、バッハがお好きな方が結構たくさんいらしたように思う。懇親会などで「この人の、この曲はいいよ」などと教えていただけるとありがたい。

ちなみに私は、モーツァルト以外の作曲家では、やはりバッハ。「マタイ受難曲」を生で聞いた時には、大変感動した。（最初の曲でもう感動してしまう）。ほかには、モンテヴェルディの「聖母マリアの夕べの祈り」、ハイドンの交響曲や協奏曲（チェロ、ピアノ）、ベートーヴェンは、後期のピアノ・ソナタが好きでよく聞きます。フランクの「ヴァイオリン・ソナタ イ長調」（妙なる音楽だと思う）、 Hindemith の「3つのピアノ・ソナタ（第1番～第3番）」（わかりにくい曲ではなく、明る過ぎも暗過ぎもせず、端正でよい。グールドの演奏を聞いている。）などが好きです。（2019.10.8 記）



祝 創立40周年

ちょっとひと言

K.526 安藤 靖雄

いっとう好きなオペラは「ドン・ジョヴァンニ」。そのわけは、大詰めの場面で石像「悔い改めよ」、ドン・ジョヴァンニ「イヤだ」というところがたまりません。反抗的な少年だったぼくは、教師から「反省しろ」と常に説教され、心の中で「悔い改めるなんて絶対しない」と叫んでいましたから。



石田 英夫

今年、モーツァルト愛好会に入会させていただきました。先日のドン・ジョヴァンニは素晴らしかった。



K.502 石原 和子

創立40周年おめでとうございます。
先輩の方々の築かれてた歴史を大切に、今後は若い方々の斬新な企画も大いに期待したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



K.488 ガーディナー・イズミ

モーツァルト・ファンになったとき、自分がどうしてモーツァルトの音楽に取り憑かれたのか、その音楽のどこに魅力がひそんでいるのか問い始めた。そんななかで愛好会に入り、モーツァルトの音楽を至上のものと感じている方々の存在をまのあたりにした。深くモーツァルトに取り憑かれた方々に接し、圧倒された。永年会員には多少なりと狂気が混じり込んでいるよう。愛好会が続いてきたのは運営委員の精魂を込めた力尽くしによっている。運営委員の皆さんのモーツァルトへの取り憑かれ方は尋常ではない。そこにひそむ狂気こそが継続の力。そんな力を二世紀半にわたって及ぼしてきたモーツァルトの音楽の力とは。動物たちまでも踊り出さずにはられない《魔笛》の霊妙な力？

♪ ♪ ♪

K.619 伊藤 正文

東京に戻る度に入会3回。モーツァルト愛好会がそのたびに発展していて驚く。そして、いつも新しいモーツァルトに会う。創立40年をお祝いします。

♪ ♪ ♪

K.271 井戸 新子

愛好会40周年おめでとうございます！
モーツァルトをクラシックでこよなく愛する人々との交流、気軽に気負いもなく、それこそATM(明るく楽しいモーツァルト)の会！
世代が交代しても、これからも多様性を受け入れ、素敵なモーツァルト愛好会になることでしょう。

♪ ♪ ♪

大塚 和徳

創立40周年とのこと、大変おめでとうございます！
ますますのご発展をお祈りいたします。
まだ入会したばかりですが、これからが楽しみです。

♪ ♪ ♪

K.387 岡本 保

40周年おめでとうございます。480回が久元さん、最高です。昨年からの新参会員ですが、この場にいらわせていただけるのが嬉しいです。長い歴史を積み上げてこられたのは、歴代の代表・役員の方々の努力の継続の賜物ですね。体の続く限り、皆様の輪の中にいさせたいと思います。

♪ ♪ ♪

「日本モーツァルト愛好会創立40周年
へ向けての一言」

K.287 勝間田 弘幸

朝吹代表を始め副代表、顧問、委員、係、当番の各位の方々、いつも本当にご苦労様、お疲

れ様です。大変お世話になりました、心深く感謝しております。数年前の演奏家の新人発掘から、先日の久元祐子様のピアノ・リサイタルに我が会が例会として参加するなど、目覚ましい企画のアイデアが次々と現れ、実現されてゆく様には目を見張るものがあり、今後益々期待が膨らみ楽しみです。

♪ ♪ ♪

K.467 川島 和子

毎月楽しい会に出席させていただき、幹事他、皆様の御苦労に心より感謝申し上げます。

♪ ♪ ♪

K.285 河北 聰子

親しみやすい曲、
でも、なぜか気になる曲を書いた
モーツァルト

♪ ♪ ♪

K.563 木本 修一郎

アドレナリンが欲しい時はベートーヴェン、
気分をすっきりさせたい時はモーツァルトの
長調、じっくり音楽を楽しみたい時はモーツァルトの短調を聴きます。

入会半年ですが、よろしくお願いします。

♪ ♪ ♪

愛好会40周年に寄せて

K.134 桐生 雅明

入会して3年、多くの得難い音楽仲間ができて、音楽とさらに深くかかわることができ、それだけ人生も豊かになりました。

現在の愛好会は高齢化やメンバーの固定化も気になります。会が今後も長く続き、私と同じような経験をする人が1人でも増えるよう、少しでも力になりたいと思います。

♪ ♪ ♪

「日本モーツァルト愛好会
創立40周年に寄せて」

K.334 栗山 康男

私の場合、かつては孫と連れ立って通った「N響ホットコンサート」くらいが音楽的体験の機会でした。

今や例会参加ごとに多岐にわたる音楽的体験が得られ幸せです。お誘いを受けて追っかけコンサートも楽しんでいます。

「ツウの人もツウでない人も楽しめる会」「ATM(明るく・楽しい・モーツァルト愛好会)」好きなフレーズです。



K.299 小林 源

当会 40 周年、言わば“不惑”の年を迎えられ衷心よりお祝いと、今日迄営々と歴史を築いてこられた先輩会員に敬意を表します。

ツウで“なさ過ぎる”のに入会のご縁を賜り、依然枯木が山ならぬ当会を、賑わせるのではなく困らせるだけの厄介者に暖かく接して下さる皆様に、栄えある将来の続かんことを。



K.476 小林 秀正

珠玉の音楽を毎月聴かせてくださった歴代の代表(桜田斉・福田邦夫・播磨克彦・宮田宗雄・高橋勇・朝吹英和さん)と運営委員スタッフの方々のご尽力にお礼申し上げます。また、今なお心に残るモーツァルトの旅を数回企画実行された紺野信寿さん・読んで楽しいアマデウス通信の創刊からの編集者泉茂行さんに心から感謝しております。



K.618 紺野 信寿

創立 40 周年おめでとうございます。例会も 2 年後には 500 回を越えるでしょう。これも一重に歴代幹事の皆さんの奮闘と会員各位のサポートがあってこそと存じます。私は 1988 年 6 月の入会、丁度 100 回目の例会でした。当時はレコード鑑賞とか委員発表が多かったのも、隔世の感がしますね。

モーツァルトは永遠です！！



K.621 酒井 隆

役員と会員とのコミュニケーションを一層緊密にする。



K.138 鈴木 範宣

今年加入したばかりですが、モーツァルトの音楽が生活の一部になってきました。

これも愛好会のおかげです。ありがとうございます。

40 年前といえば、モーツァルトが自分にとって特別な作曲家になった時期でもあります。これからもみなさんとともに、モーツァルトの音楽を広く、深く楽しんでいけたら幸いです。



K.516 鈴木 光治

貴方の子孫たる私達は、百数十名の大家族になりました。

長兄は今年齡 40 になり、毎月行われる晩餐会は、それは楽しく、敬愛する貴方を讃え、時の経過を忘れます。

数多の良き先輩、良き友人に囲まれての一刻は、真に得難いものとなって居ります。

これも貴方のお陰かと、幸せを心に抱き、叫びます。

”モーツァルトよ 永遠なれ”と。



瀬戸岡 紘

モーツァルトの調べは、西欧音楽、いえ、そればかりか、世界の音楽の頂点。かれは、18 世紀後半に、ホンの少しだけこの世に姿を現したあとは、二度と現れ得ない人。

その作品は、女神のように美しい。たとえば、ピアノ曲。

ちょっと弾けそうに感じられるのですが、

やはり、私には、マダマダ。だから、私は、
ますます引き寄せられてしまうのです。

♪ ♪ ♪

K.339 曾村 容子

おめでとうございます。

諸先輩の御尽力に依り輝かしい 40 年の刻を
迎えられ、このような歴史ある愛好会に入会
出来ましたこと、光栄に存じて居ります。今
後、ますますの会の隆盛を祈念致し、何かお
手伝いを出来ればと思っております。

♪ ♪ ♪

K.279 高橋 郁代

祝！ 40 年間、会を紡いで来られた方々に敬
意を表します。モーツァルトの魅力が尽きな
い様に、愛好会も若々しく素敵なモーツァル
トの音楽の泉でありますように。

♪ ♪ ♪

K.543 高橋 勇

40 周年を迎え愛好会の歴史をつくづくと感じ
ています。

また 20 周年、30 周年を顧みて改めて共通項
があるのに気が付きました。それは共にモー
ツァルトの神髄である「歌」によりプログラム
が組まれていることです。20 周年ではフレッ
シュな増田のり子さんのエクスルターテ・ユ
ビラーテが華々しく、30 周年では彌勒忠史さ
ん演出による「コシ・ファン・トゥッテ」をはじ
めとするオペラ・ガラコンサート、そして 40
周年は満を持して再び増田のり子さんによる
「コシ・ファン・トゥッテ」全曲です。愛好会の
高いセンスを感じます。

♪ ♪ ♪

K.491 高橋 佳代子

愛好会独自の企画によるオペラ全曲を楽しみ
にしています。

♪ ♪ ♪

武居 祥子

程良い人数の会場で、演奏する方と聴く人
が気持ちをひとつにして音楽に酔う午後のひ
とときは、他では得られない素晴らしい時間
です。

ただ音楽大好きの全く素人の私も、忙しさ
に疲れたとき、悩んだとき、とても大きな力
をいただきました。企画、運営していただく
方々に心からお礼申し上げます。

♪ ♪ ♪

武居 伸一

入会 20 年となります。毎月素晴らしい演奏会
にふれたり、詳しいお話を聞いて、通でない
私のモーツァルト生活もかなり充実してきま
した。

歴代の幹事の皆様に感謝です。

♪ ♪ ♪

K.576 谷 整彦

愛好会創立 40 周年まことにお目出とうござ
います。この会のような同好会が 40 年も続い
て来たことは奇跡に近いことかも知れませ
ん。歴代の世話人の方々に心から感謝したい
と思います。私は入会してまだ 5~6 年です
が、もっと若い時に入会していれば何かお手
伝いが出来たのにと思ったりもします。余命
も短くなりつつある現在、元気なうちに出来
るだけ参加し、モーツァルトを身近に感じて
いきたいと思っています。

♪ ♪ ♪

K.620 地口 浩平

創立四〇周年ご同慶のいたりです。代表はじ
め運営委員の方々のご尽力に感謝します。
私たちはモーツァルトの優美な旋律と豊かな
感情表現に誘われて集まる仲間です。この会
は室内楽を中心に、時にはオペラ、アリア、
ピリオド楽器ありの肩のこらない例会です。
また、出演者と語りあえる例会後の懇親会も
この会の魅力の一つです。

要望

アリアと歌曲をもう少し増やしていただくと嬉しい。

♪ ♪ ♪

K.417 鶴田 厚子

ツウの方もそうでない方も……とありますが、後者の方で入会させて頂いております。参加できた日はすばらしいひとときを過ごすことが出来、モーツァルトさんに感謝です。

♪ ♪ ♪

K.504 富永 壮一

入会して約8年、皆様の知識の豊富さと見識の深さにはほとほと感心して居ります。これから何かと話題について行けるよう心懸けて余生を楽しんで参りたいと思って居ります。そこで何より楽しみなのは生演奏が隔月に聴けると言うことです。しかもその上に懇親会でアーティストの皆さんとお話が出来る。こんな楽しい事はありません。今後共どうか宜敷くお願い申し上げます。

♪ ♪ ♪

K.385 中川 順志

会員になってから、一口にモーツァルトファンといっても、さまざまな嗜好の方がいることに気付きました。700以上ある曲は多彩な性格を持っているのですから当然です。それでも皆さんがモーツァルトファンです。普段は憚られるモーツァルトについて話すことができる愛好会が、これからも続いていくことを願います。

♪ ♪ ♪

K.376 中沢 義征

モーツァルトとのお付き合いは、定年間近の2010年秋からのある市民講座で海老澤敏先生の講義を1年半聴講したことに始まりました。この間、中欧には2度行き、プラハでの人形劇、ウィーンとザルツブルクでのコンサ

ートも楽しみました。毎日、アマデウスさんに心が癒されています。

♪ ♪ ♪

《祝 創立40周年ちょっとひとこと》

K.466 中條 熙子

日本モーツァルト愛好会創立40周年おめでとうございます。

モーツァルトの年齢をとくに越えましたね。

これ迄運営に携わって来られた方々に心から感謝申し上げます。

私は入会して10年余り。その間モーツァルトの音楽に心癒され素敵なお仲間との交流は心の糧となりました。

ツウでもツウでなくてもATM。愛好会のみずみずの発展をお祈りいたします。

「日本モーツァルト愛好会」よ 永遠に！！

♪ ♪ ♪

K.136 西村 和夫

入会4年になりますが、いつも一年生です。

ウィーン等の旅行、二次会の楽しい一刻、思い出がいっぱい有ります。友達も出来、これからは優等生でありたいと思います。

♪ ♪ ♪

K.218 野村 藤雄

本年4月に入会した野村です。年齢を重ねると共に室内楽に惹かれるようになりました。特に愛好会の例会に参加して、生演奏でしか味わえない緊張感に感動させていただいて居ります。

♪ ♪ ♪

K.378 乗松 昭

モーツァルト没後200年の1991年は空前のモーツァルト・ブームで日本中が沸いたこれに触発されて1994年日本モーツァルト愛好会に入会した楽しいときも悲しいときも

モーツァルトの音楽に慰められ励まされた
モーツァルトはわたくしの生き甲斐
日本モーツァルト愛好会は永遠！

♪ ♪ ♪

K.581 広瀬 哲哉

2013年4月に愛好会に入会。40年もの長きに
渡り、愛好会が存続しているのは諸先輩方が、
核になる部分はしっかり守りながらも、時代
の流れや会員各位の期待・所望に応じて、自
らを変えて来たことの結果だと思います。「愛
好会ならではの」の例会企画で、会員各位に喜
んでいただき、その輪が一層広がるよう尽力
したいと思います。（運営委員・企画委員）

♪ ♪ ♪

K.595 藤本 哲

「日本モーツァルト愛好会創立40周年」まこ
とにお目度うございます。私も入会させて
いただき早10年アッという間に経ちました。
モーツァルトの好きな人に悪い人はいないと
申しますが、愛好会では多くの人に親しくし
ていただき、楽しい半生を過ごすことが出来
ました。今や世界は混沌としています、世
界の指導者たちもモーツァルトを通じて仲良
くしてもらい、世界平和に貢献してもらいた
いものです。

♪ ♪ ♪

K.537 藤本 康子

毎年のように天災に見舞われ、世界のあちこ
ちで紛争の種が付きないこの頃です。
不安な気持ちで暮らしている日々の中で、モ
ーツァルトの曲を聞くと心がいやされます。
幸せな気持ちになります。

♪ ♪ ♪

K.614 松尾 茂男

私の愛好会歴も20年を越えました。オープン
直後のよこはま・みなとみらい小ホールを借
り切った愛好会の20周年記念公演や日比谷

星陵会館で後藤さん、小川さんの喜寿祝賀パ
ーティを開催したことなど楽しい思い出とな
りました。これからも元気なら、皆様の仲間
入りを続けさせていただきます。

愛好会20周年公演では若き増田のり子さん
がエクスルターテュビラーテを披露してくれ
ました。その後日本を代表するモーツァルト
歌手として活躍して来ましたが、この度再び
愛好会40周年記念でフィオルディリージを
歌って下さること、とてもうれしく楽しみに
しております。

♪ ♪ ♪

K.456 簗島 紘一

モーツァルトがあと5年長生きできて健康で
あったら、必ずやスペイン・ポルトガルに旅
を試みたらと想像しております。fiction
で「モーツァルトのスペイン」と題したフィ
クション小説に挑んでみたいと想っています。

♪ ♪ ♪

K.450 宮田 宗雄

祝40周年！

「光陰矢のごとし」愛好会に入会して28年、
創立から483回の例会の積み重ねに感慨深い
思いがします。特筆すべきは、'07年4月から
の代表8年の期間に立ち上げた「若手演奏家
シリーズ」で、今も脈々と続き、出演された
方々のその後の活躍ぶりを見るにつけ、この
上ない喜びを感じます。

♪ ♪ ♪

K.317 本吉 英紀

この会に入会して20年以上が過ぎました。そ
の間、お茶の水のヴォーリズホール、中野坂
上のハーモニーホール、そして光が丘美術館
とコンサートのホームグラウンドは変化して来
ました。

自分たちのために演奏されるモーツァルトの
音楽を、毎月のように楽しむことが出来る幸

せを改めて、思います。この会が、これからも長く続くことを願います。

♪ ♪ ♪

K.545 森下 英子

モーツァルトは永遠。

日本モーツァルト愛好会は永遠。

皆様と共に私も“永遠”に向かって、楽しく過ごしてまいりましょう。

♪ ♪ ♪

K.397 森田 勉

入会して4年経ちました。毎月楽しみに行っています。

これからも皆さんの力でずっと長く続けたいですね。

♪ ♪ ♪

K.379 安原 秀樹

創立40周年という節目の時に一緒にできて嬉しく思います。今後50周年、100周年と続いていく事を願います。

♪ ♪ ♪

K.364 山崎 映一

今年で入会20年になります。愛好会での「モーツァルト巡礼の旅」は充実した楽しい思い出ばかりで、現在でもありありと思い出します。現在の妻、節子と出会ったのも20年前の愛好会でした。

モーツァルトと愛好会のお陰と感謝しています。

♪ ♪ ♪

山崎 幸子

代表はじめ執行部の皆様のご努力のお陰で、楽しい音楽を聴くことができると思っています。ありがとうございます。

♪ ♪ ♪

山田 興達

モーツァルトを愛する人達の中に入り、その上創立40周年目に参加できることは、この上なく幸せです。

愛好会が末永く続くことを祈っています。

♪ ♪ ♪

K.527 吉田 智子

入会したのは1992年9月ですから、27年の古参会員です。

モーツァルトを愛する仲間と素晴らしい演奏家との出会いが人生の宝となりました。

会の仕事で忙殺されても、例会で生の演奏を聴いている時が、一番の安らぎ、幸福なのかしらん。

♪ ♪ ♪

K.157 吉野 義夫

愛好会40周年をお祝い申し上げます。

私自身は入会して7年を過ぎたところですが、例会と懇親会を大いに楽しませて頂いています。

愛好会は他に類を見ない親睦団体だと思います。入会して良かった！

入会してすぐに（故）播磨さんがリーダーのイタリア・ロヴェレート（モーツァルト音楽祭）旅行に参加しました。4月に入会して5月に参加申し込みをするという我ながら思い切った行動でしたが、数々の貴重な思い出が残る旅行でした。参加して良かった！

これからも愛好会の皆さんとモーツァルトを学び、楽しんで行きたいと思っています。



第478回例会だより

日時：2019年9月7日（開演2時）

会場：光が丘美術館

報告：K.134 桐生雅明

ーナイーブな感性が奏でるモーツァルトー

～聴く機会の希な作品の魅力を体感～

○定番の名作と聴く機会の希な作品を組み合わせた多彩なプログラム

9月例会は、澤辺明音さん、中山瞳さん（中山さんは賛助出演）の2人のピアニストによるソロと連弾のプログラムだった。

「ロンド ニ長調 K.485」、「デュポールのメヌエットによる9つの変奏曲 ニ長調 K.573」、「ピアノソナタ 12番 ヘ長調 K.332」（以上、澤辺さんのソロ）といった定番の名作と、「4手のためのピアノソナタ ニ長調 K.381」（連弾）、L.モーツァルト「ナンネルの楽譜帳」から22, 23番、「サリエリの歌劇『ヴェネツィアの定期市』のアリア『わがいとしのアドーネ』による変奏曲 ト長調 K.180」（中山さんのソロ）、ライネッケが編曲した「ピアノ協奏曲 21番 ハ長調 K.467」（澤辺さんのソロ）という、ふだん聴く機会の希な曲目の両方を組み合わせた多彩で興味津々のプログラムだった。

○「4手のためのピアノソナタ」は2人の楽しいおしゃべり！

K.485のロンドとK.573の変奏曲はやや早めのテンポの澄んだ表現、K.332のソナタ12番は光と影が交錯する表情豊かな演奏だった。

続く「4手のためのピアノソナタ K.381」は殆ど演奏されず、録音も日本で入手できるのはわずか3種類という珍しい作品だが、何と楽しい曲！！（精神的な快楽を感じると「愉」という字を使いたくなる）モーツァルトの曲は、器楽曲でも楽器同士のおしゃべりに聴こえるが、このソナタも全曲2人のおしゃべり（後のインタビューで中山さんも同じ話をされた）。音楽としての息もぴったりだった。第1楽章は活発なおしゃべり、第2楽章はひそひそ話、第3楽章は再び楽しいおしゃべり。おもちゃ箱をひっくり返して遊ぶ子供のような無邪気な曲。

○インタビューも楽しいおしゃべり

インタビューは、出演者2人が互いにインタビューする形で進められた。親しい間柄を反映して雰囲気も直前に演奏された「4手のためのピアノソナタ」のようだった。以下に一部を紹介する。

澤辺：今日の演奏はどうでしたか？

中山：ベーゼンドルファーのピアノでしたが、大きなホールよりも今日のような規模の会場の方が楽器に合っていると思いました。

澤辺：中山さんは外国生活が長いですが、どんなことが印象に残りましたか？

中山：町のいたるところに音楽があることです。オペラの音楽が流れているトイレもありました。日本では考えられないです。澤辺さんは？

澤辺：中山さんと2人で、オーストリアでセミナーに行きました。カラッとしていましたが、暑いのにエアコンがなく大変な思いをしました。日本語の音声ガイドが流れていたのも印象に残っています。

中山：明音さんにとってモーツァルトとは？

澤辺：心の支え、なくてはならぬもの、いちばん好きな作曲家です。バッハの「マタイ受難曲」も好きですが、つらいときには聴けません。モーツァルトはどんなときにも聴けます。中山さんは？

中山：私はオペラです。どの曲もオペラに聴こえます。登場人物がいて歌を歌っているようです。

澤辺：今後どんなことをしたいですか？

中山：オーストリア人のドイツ語は分かりにくいですが、それが分かるようになりたいです。

澤辺：コンサートでは必ずモーツァルトを演奏したいです。

中山：来年(2020年)2月25日にサロンコンサートをしますので、よろしく。

澤辺：来年(2020年)4月17日に、カワイ表参道「パウゼ」で行うリサイタルでもモーツァルトを弾きますので、よろしく。

インタビュー終了後、澤辺さんの師であり

澤辺さんを推薦してくださった小倉貴久子さんからの激励メッセージが披露された。

○プログラム後半も珍しく楽しい曲が並ぶ

後半も、L. モーツァルト「ナンネルの楽譜帳 22, 23 番」(澤辺さんのソロ)、「サリエーリの歌劇『ヴェネツィアの定期市』のアリアによる 6 つの変奏曲 K. 180」(中山さんのソロ)、ライネッケ編曲による「ピアノ協奏曲 21 番 K. 467」(澤辺さんのソロ)といった聴く機会の希な曲が並んだ。

「サリエーリの歌劇のアリアによる 6 つの変奏曲 K. 180」は、短くてかわいい曲。最後の 1 つ前の第 5 変奏の夢見心地は、私には特に印象的だった。ライネッケ編曲の「ピアノ協奏曲 21 番」は、1 台のピアノでコンチェルトという大胆な作品。オケとソロの一人二役をどうこなすかが見ものだが、こうした作品に挑戦されただけあって、原作とは別の魅力を発散していた。原曲を知らない人が聴いたらどう感じるだろうか？

名作だけでなく、聴く機会も稀な作品の魅力にも気づかせてくれたお 2 人、ありがとう。



楽屋口から (9)

閑話休題

K.191 白石 孝

今回はちょっとモーツァルトや音楽から離れて日本モーツァルト愛好会の存在意義みたいなものに触れてみることにする。

当会のホームページでは：

『ツウの方も、ツウでない方も、楽しめる会』をモットーにしています。

モーツァルトは、父レオポルトに宛てた手紙の中で、出来上がった曲について、こう記しています。

『・・・あちこちに音楽通だけが満足を覚える箇所もありながら、それでいて、通でない人にも、なぜか知らないながらも、きっと満足

するものです・・・』

そんなモーツァルトの、自らの楽曲に対する思いを、私たち日本モーツァルト愛好会のモットーとし、どんな方でも楽しめる会として活動しています。

また、モーツァルトを通じて、幅広い年代での交流があります。

とある。

という事はモーツァルトさえ中心に据えてあれば何でもありという事になる。となればプログラムを考える人はこんな楽なことはないだろう。

大変なことと言えば如何に少ない予算で良い演奏家と呼ぶか、会場の確保は、会員の管理は、などと言ったことかと思う。

一方、聴く側は日本モーツァルト愛好会に何を求めて参集しているのだろうか。

- ・クラシック音楽は敷居が高そうだが愛好会のモットーを信じて聴いてみよう

- ・CDやレコードといった缶詰音楽ばかり聴いていた者にとって生を手軽に聴けるのは嬉しい

- ・通と自負している。この奏者はどんな演奏するのか楽しみである

- ・曲は何でもいい。集ってくる人とコミュニケーションできるのが楽しみだ

- ・音楽を聴くことは脳にとって大変いいらしい

- ・終了後、奏者を交えた懇親会が行われているそう。美人も多いらしく価値ありだ

- ・家にいると邪魔者扱いされる。しからば文化の香りがするクラシック音楽でもなどなど千差万別であると推察。

これが正しければ(正しいと信じているが)聴衆全員が満足する企画などまずあり得ないだろう。

朝の連続テレビ小説を例にしても視聴率はそこそこで無難なものあり、視聴率は低かったが熱烈なファンがいたり。後者の例では「ちりとてちん」がその代表格で、私も熱き想い

で見ていた。

では聴衆の立場としてあまり満足できなかった場合はどうすればよいのだろうか。

不満に思うのは多分

①その曲をよく知っている

②自分は何の演奏がいいという思いこみがある

③それと比較してしまう

といったロジックが形成されるためではないだろうか。

それは仕方のないことである。特に名曲と言われ繰り返し演奏されている曲などで顕著。またどの世界でも共通の話だと思う。写真の世界でも「富士山」等が筆頭格。五万とある中に「これいいでしょ」といって出しても「どこがいいの」で終わるのがオチ。

一つ目の提案は：

とにかくその演奏の長所を探してみよう。あるいは探す努力をしてみよう。

人間で例えてみても「自分は何の取り柄も無い人間である。」と思っている人でも他人から見ると「コツコツと忍耐強い」、「いたわる気持ちが人一倍強い」など長所はあるものである。

二つ目の提案は：

演奏に目を向けるのは止めにして曲に目を向けてみよう。

小学校で教わるところの音楽はリズム・メロディー・ハーモニーから成り立っている。手始めにリズムを徹底して追い求めているのはどうだろう。

ワールドワイドに見れば4分の4拍子の曲が圧倒的に多い。

行進曲の多くは2拍子、ワルツやメヌエットは3拍子。これは簡単。

では8分の6拍子はどうか。これを完全に数えられるようになったらリズムは一応マスターと言っても過言ではない。

演奏する側から言わせてもらおうと（1， 2， 3， 4， 5， 6）と6拍子で拍をとる場合と（1、ト、ト、2、ト、ト）と2拍子で各拍

3連符ととる場合がある。テンポがゆっくりの曲では全員6拍で数え、速い曲では2拍に数えるが、中間が問題である。6拍に数える人・2拍に数える人が混在するとお尻がムズムズする。

日本人に一番、馴染まないのがこの8分の6拍子。

さて、またモーツァルト愛好会に戻ろう。

この「楽屋口から」も9回目を迎えた。今まではどちらかと言うとレクチャー的な内容が多かったように感じている。

これからは少し話の中心を「素晴らしい音楽とは」にシフトしていこうと考えている。基本である奏者目線からという点はあるが、

これは壮大なチャレンジだと思うが毎回、切り口を変えつつ問いかけていくつもりである。

丁度、沖サロンコンサートが再開され、今後どう進めていこうかと議論の真っ最中である。そこで世話人にも選ばれたので、この「素晴らしい音楽とは」を中心に据えてはと提案している所である。（つづく）



初めての愛好会旅行、ザルツブルグ、ウィーン、プラハ

K.618 紺野 信壽

ザルツブルグにはモーツァルトの家が二つある。生まれた家は街の中心地、ゲトライデガッセにあり、今は生家記念館として公開されている。モーツァルト一家は手狭になったその家から、ザルツァッハ川対岸のマルクト広場に面した大きな家に引っ越した。モーツァ

ルト17歳のときである。彼はそこに24歳でウィーンに移るまで住んだのであった。タンツマイスターハウスと呼ばれたその家は、第2次大戦の空襲で半壊となり、壊れた部分には新しい別の建物ができた。モーツアルテウム財団は彼の没後200年を記念してそこを買い取り、新たに住家記念館として保存するため、世界の愛好家に募金を呼びかけたのであった。わが愛好会も福田代表、宮田さんが中心となり例会ごとに募金箱を設置して、集まった金を財団に寄付したのだ。入念な復元工事は数年かかり、1996年1月26日に完成記念式典が行われた。募金者は記念館のプレートに記名顕彰されると聞いたので、それを確認するとともに記念館も見学したいとの声が上がった。

その年の夏休みに有志でそれを実行することにした。メンバーは福田代表ご夫妻、宮田さん、滝沢さん、小林秀正さん、乗松さん、中村至さん、加藤木さん、藤原さん（現地参加）と小生、女性は倉持さん、岡さん、天野小石さん、川本恵野さんの合計14人であった。福田さんが財団の専務、アンガーミュラー博士と連絡されて、特別のアポイントを取ってくださった。私は幹事を引き受けて、日程のアレンジや飛行機の手配、ホテルや列車の予約などを、当時は手紙と電話でやったものだった。

8月17日朝成田発、ウィーンで乗り継いで夜ザルツブルグ着、翌18日は大聖堂で日曜朝のミサに参り、昼は生家の見学や観光で過ごし、夜は大学の教会でレクイエムの演奏を聴いた。

19日月曜日早朝、まだ開館前の住家記念館でアンガーミュラー博士が我々を迎えて下さり、愛好会の名前の入ったプレートを見て感激した我々を、一般の見学コースはおろか、非公開の直筆の楽譜や手紙の見られる部屋まで案内してくださった。5分ほど歩いた先の財団本部のビルでは整然とした図書室を見学し、中庭ではウィーンから移築された、これ

も非公開の魔笛小屋の内部まで見せていただいた。ほんのわずかの寄付に対して、心から歓迎してくださるモーツアルテウムの皆さんは、我々と同じモーツアルト愛好者なのだと感謝感激したのであった。

20日は列車でウィーンへ移動、シュテファン大聖堂やシェーンブルン宮殿を見学、21日朝、市内電車で聖マルクス墓地のモーツアルトの墓へ花を持参して手向けた。夜はモーツアルト・コスチュームのアンサンブルコンサート。

22日朝飛行機でプラハへ。メンバーの女性の一人がウィーン空港でパスポートを託送荷物に入れて出してしまうて大慌て、係官に事情説明して懇願したら通してくれた、プラハでも入国できたので一安心。しかしホテルは予約したのに確認が取れず、チェックインで大分またされた。このホテルはブルタバ川のほとりの城山（ヴィシェクラッド）の近くで、そばにスメタナやドボルザークのお墓があった。夜エステート劇場で「フィガロの結婚」を観る。この劇場は「ドン・ジョヴァンニ」の初演をモーツアルトが指揮したところ、内部は当時のままで感激。

23日朝、ベルトラムカへ。モーツアルトの友人だったドゥーシェク伯爵夫妻の美しい山荘。モーツアルトが逗留し、「ドン・ジョヴァンニ」の序曲を初演の前夜に一晩で書いたとか、ソプラノ歌手のドゥーシェク夫人に缶詰めにされて夫人用のアリアを書いたとか、エピソードの多い有名なところ。夜にはサロンコンサートもあって深夜に及んだ。現在は閉鎖されていて見学できないと聞いた。

25日夕方プラハ発、ウィーン空港のチェックインカウンターで、「一部の人の日本行きのリコンファームがされていないから乗せない」という。「そんなことはない、日本からウィーンに来てすぐ電話で全員のコンファームをした」と激論、先方が折れて3人分はビジネスクラスにしてくれた。せっかくなので女性の皆さんに座っていただいた。ジャンボ

の2階席でシャンパンなどが出てよかったらしい。26日午後成田着、解散。

とにかくその頃はインフラが悪くて、電話もかかりにくく、苦勞して旅行できたのは逆に懐かしい。今はインターネットで旅のアレンジは確実にできるし、オペラやコンサートの切符も取れる、空港も自動化が進み、現地では現金が無くてもほとんどカードで払えるようになった。まだザルツブルグ、ウィーンへ行っておられない方、一度はぜひモーツァルトのメッカへ巡礼なさるようお勧めしたい。

なお、住家復元のいきさつや工事の詳細は、1996年3月3日にTBSから「いま甦るモーツァルト」（解説：筑紫哲也、頼近美津子）という番組で放映されている。機会があればこの録画も皆さんに観ていただきたい。

モーツァルトこぼれ話



K.425 朝吹 英和

【時系列の無視】

ドンナ・アンナとドン・ジョヴァンニが縛れながら現れ、騒ぎを聞きつけた父の騎士長との決闘、騎士長の死と緊迫した場面が展開する「ドン・ジョヴァンニ」冒頭の音楽は素晴らしく聴き手を一気にドラマの現場に引き込んでしまう。

やがて、助けを呼びに戻ったアンナは許婚のドン・オッターヴィオを伴って登場する。深夜で連絡手段とてない時代にすぐさまオッターヴィオが現れるのは不自然極まりないが、一日の出来事を描いたオペラであれば、時空のスキップは許されるのであろう。実演でこの場面に遭遇するとつい「オッターヴィオはん、急に出てきよって、何処におったんや」と何故か関西弁風に口走りそうになる私である。

【空耳】

外国語の歌詞が日本語のように聞こえる「空耳」。「フィガロの結婚」第3幕の伯爵の台詞が「助かりました」と聞こえるのは有名であるが、「ドン・ジョヴァンニ」の第2幕第2景の六重唱（20番）では変装がバレて狼狽するレポレロと騙されて混乱するエルヴィラやアンナ組、ツェルリーナ組の歌が目まぐるしく交錯する。終盤で早口のレポレロの歌唱が私には「かいぐり・かいぐり」と聞こえる。只管低姿勢で許しを請うレポレロの歌と幼児をあやす「かいぐりかぐりとつとめ」の逢いは何時も微笑んでしまう場面である。（流石に「とつとのめ」は聴こえない）

また、「レクイエム」の「オッフエルトリウム」（奉献唱）の中での合唱の一部が私にはレクイエムに相応しく「守りますえ」と聞こえる。余談ながら大衆食堂はイタリア語では「タベルナ」（taverna）であるが、「食堂で食べるなどは」という突っ込みたくなるような冗談めいた偶然の一致もある。日本語もイタリア語も言葉が母音で終わる「開音節言語」ゆえに似たように聞こえるのだそうである。（反対に英語は子音で終わる「閉音節言語」ゆえに日本人の英語の発音が中々通じ難い要因のひとつとされている）

余談ついでにイタリア旅行に行った時に現地の日本人ガイドがイタリア人気質の特徴を「アモーレ・マンジャーレ・カンターレ」（愛して・食べて・歌え）と紹介していた事を覚えている。

【絶妙な場面転換】

前掲の「ドン・ジョヴァンニ」の第2幕第2景の六重唱（20番）の冒頭、ドン・ジョヴァンニに変装したレポレロがエルヴィラを伴ってアンナの館の前庭に迷い込んだ場面、暗闇で近付く松明の灯りに怯えるレポレロが出口を探していると灯りを持った召使を従えてアンナとオッターヴィオが登場する。そこでの経過部分は僅か2～3小節であるが、ティンパニのトレモロを伴うトランペットとオ

ーボエの旋律が登場感のある場面転換を鮮やかに演出している。

同じく「ドン・ジョヴァンニ」の第1幕フィナーレ、マゼットが隠れて見ていようとツェルリーナに呼びかけて始まり、やがてツェルリーナが「すぐに見つかって殺される」と怯える場面では低弦の響きが揺れ動く不安感を醸成する。そこに突如としてフォルテの金管やティンパニが鳴り響くが、僅か2小節で高潔な威厳に溢れエネルギーを放射するドン・ジョヴァンニが颯爽と登場する場面転換が鮮烈である。

僅か数小節で場面の空気をガラッと変えるモーツァルトの魔法。時空転位、クオントム・リープ（不連続の飛躍）、鮮やかな転調等「神ってるモーツァルト」の特徴である有機的な肉体感を感じる瞬間である。

【カメラ目線のレポレロと金歯のツェルリーナ】

奇妙なタイトルを訝しく思われた方もおられるであろう。フルトヴェングラーはザルツブルク音楽祭で何度か「ドン・ジョヴァンニ」を上演しているが、1954年8月の上演に際しては、本公演の他に映画用の特別公演があった。

その映画は1968年頃に日本でも公開されて私も鑑賞した記憶がある。序曲を指揮するフルトヴェングラーの姿が見られるとあってクラシックファンの間で評判になった映画である。（その後はDVDとして発売された）

然しながら序曲を除く舞台上での様子は収録とは別に同年10月に演技の撮影だけが行われた所謂「ロパク」映像である。冒頭に登場するレポレロ（エーデルマン）が頻りにカメラを意識して不自然なのが目についた。また、ツェルリーナ役はエレナ・ベルガー（当時53歳）であったが、アップの映像では金歯が光って見えて興覚めであった事を記憶している。実演の舞台では見えない筈がアップの映像では誤魔化せなかった訳である。また、本公演ではシュワルツコップフが歌ったエル

ヴィラ役はスケジュールの都合なのかリザ・デラ・カーザに変更となっている。

【終結和音】

「レクイエム」の最後はキリエのフーガが再現・回帰して終結するが、最後のティンパニは全音符である。ティンパニが一撃で終止するか、トレモロのロール打ちで終止するかは指揮者の解釈次第のようである。CDに聴く演奏で一撃派はバーム／ウィーンフィル盤（1971年）を始めとして多数派であり、トレモロ派はK. リヒター／ミュンヘンバッハ管弦楽団盤（1960年）等少数派である。

終結和音の演奏方法に疑問を感じた私はかつて礪山 雅先生に質問した所、「指揮者の解釈です」と明言され、指揮者である鈴木優人氏にお聞きした所、「最終的には指揮者の解釈ですが、ティンパニ奏者によってはトレモロで叩かせて欲しいと注文を付ける方もあり、指揮者と協議する場合もある」との事であった。

学生時代にLP盤で聴いたシェルヘン／ウィーン国立歌劇場管弦楽団盤（1958年）の演奏での最後の2小節はまるでドラム缶を叩いたような割れんばかりの大音響のティンパニの強打が印象的であった。当時のマイク設定のせいであろうが、CDの復刻盤でもインパクトのあるティンパニの強打を聴く事が出来る。モーツァルトに関する逸話や演奏の機微などは枚挙に暇がなく、音楽を聴く楽しみのひとつであろう。

❖ ❖ ❖

【 新会員の紹介 】



アンケート様式でご紹介します。[投稿をお願いします。常時受付中!]

- ① 氏名； 白杵 督郎
- ② 住所； 千葉県鎌ヶ谷市
- ③ 紹介者； ー
- ④ 入会のきっかけ；

例会カレンダーを見て

- ⑤ ケッヘル番号； —
- ⑥ モーツァルト歴；
気がついたら（学生の頃）
- ⑦ 会に何を期待しますか； —
- ⑧ 好きな曲； —
- ⑨ 趣味； —
- ⑩ その他； —



- ①氏名； 木本 修一郎
- ②住所； 東京都杉並区
- ③紹介者； —
- ④入会のきっかけ；
ホームページを見て
- ⑤ケッヘル番号； —
- ⑥モーツァルト歴；45 年（ファンになってからの年数）
- ⑦ 会に何を期待しますか； —
- ⑧ 好きな曲；室内楽、モーツァルトなら弦楽五重奏。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲。バッハのゴールドベルク変奏曲。
- ⑨ 趣味；
歴史、世界経済ウォッチ、サイクリング
- ⑩ その他；
毎年大晦日に東京文化会館小ホールでベートーヴェンの弦楽四重奏曲 9 曲の連続演奏会に行っていますが、一度交響曲 9 曲の連続演奏会にもチャレンジしてみたいのです。一人だと忍耐力が続くか自信がありません。どなたか一緒にいたけると幸いです。



- ①氏名； 安原 秀樹
- ②住所； 横浜市鶴見区
- ③紹介者；神谷さん
- ④入会のきっかけ；
モーツァルト協会の懇親会で神谷さんとお話した事
- ⑤ケッヘル番号； K.379

- ⑥モーツァルト歴；36 年（ファンになってからの年数）
- ⑦ 会に何を期待しますか；
オール・モーツァルト関連楽曲の演奏会の開催継続。モーツァルトが好きな演奏家の発掘と応援。ピアノ協奏曲の室内楽版等色々な編曲の演奏。
- ⑧ 好きな曲；（好きな順番ではありません）
K.379,K.511,K.594,K.394,K.282,K.617,K.425,K.338,K.504,K.620,K.334,K.287,K.320,K.219,K.207,K.589,K.593,K.515,K.387,K.370,K.292,K.476,K.297b,K.622,K.136-138
- ⑨ 趣味；
バドミントン（～3 年）
- ⑩ その他；
愛好会の活動を通して微力ながらモーツァルトの音楽の普及に貢献できれば幸いです。



新コラム開設

リレー・トーク



日本モーツァルト愛好会も創立 40 周年を迎えようとしています。そこでアマデウス通信にもリニューアルの風を。

会員数も増え、顔はよく見かけるがお名前は？という経験をお持ちの方も多と思います。新コラム名は「リレー・トーク」とし「顔と名前を一致させる」・「そんな趣味もお持ちだったのか」など会員相互の交流を深めるお手伝いを……という趣旨を柱に据えてスタートさせます。

コラム執筆者は

- ① 日常生活からのエッセイ、あるいは特技・趣味の紹介など音楽以外の内容なら何でも OK
- ② 字数は 200～400 字程度
- ③ 顔写真を添える（会員相互で顔と名前が一致するように）

④ 「次の執筆者を指名する」をルールとする。指名を受けた方は執筆を断らない、というルールが定着するよう、皆様方の協力をお願いいたします。

本号ではトップ・バッターとして安藤さんをお願いしました。

(なお本企画は、K.191 白石孝さんの提案を採用させて頂きました。)



K.526 安藤 靖雄

新企画のトップ・バッターを仰せつかり光栄です。「愛好会」2年余の新人です。

私は、新聞社に勤めておりました。紙面編集、記事の配置を決め見出しをつける(「整理」といいます)仕事が長かった。勤務時間はまちまち、不規則な睡眠、食事、欠かせないお酒、たばこ。絵にかいたような不健康な生活で、血液ドロドロ、難聴になり左耳はほとんど聞こえません。リタイア後は、歩くことを習慣づけ、なんとか健康を保っています。趣味は主に読書。時代物が好きで宇江佐真理、佐藤雅美、葉室麟(みな故人)を愛読しました。

モーツァルトとは「扉越し」に出会いました。杉並区荻窪の平凡な家に住んでおり、お隣はお金持ちの家。中学1年生だったか、日曜日になると、朝食の終わったころ、優雅な音楽が聞こえてくる。昭和30年代初め、LPが普及してきたころです。それが交響曲39番(もちろん後で知ったことです)。メヌエットが美しいと思いました。高校のころからクラシック音楽に親しむようになり、いろいろ聴きましたが、やっぱりモーツァルトが一番好きだと自覚しました。父も39番を好んだ。母との新婚時代を過ごした上海でよく聴いていたそうです。音楽の好みは遺伝するのかな。

以上

(次回はケッヘル番号がお隣の吉田智子さま

にバトンをお渡ししたいと存じます。よろしくお願い申し上げます)



追悼 !

K.450 宮田 宗雄

昨年の礒山雅先生(アマデウス通信49号に投稿)に続いて、また愛好会にとって掛け替えのない知識人のお一人、ドイツ文学者でエッセイストの池内紀先生が8月30日に旅立たれた。78歳であった。

先日、朝日新聞夕刊のコラムに、池内先生への惜別の辞が載っていた。「...週刊朝日時代、書評の原稿を受けるのが楽しみだった。丸っこい字が躍る手書きの原稿。表紙に自筆のイラストを添えてファックスで送ってきた。...」

2013年6月23日、愛好会第404回の例会で『旅するモーツァルト』というテーマで講演をしていただいた。その講演を依頼した時、同じように自筆で「お受けします」とファックスで送られてきた。その時のイラストは、確か小鳥だったと思う。

その講演の一部で、フランス語でMozart(モザール)の名前の意味について触れられた。MO=言葉、Z=and、ART=芸術、即ちMozartという名前には、言葉と芸術という意味が込められている。モーツァルトの芸術性は、持って生まれたものだというようなお話しをされたことが印象的であった。

今年10月の例会は、サントリー・ブルーローズで久元祐子さんのモーツァルトのピアノリサイタルであった。池内先生は久元さんと親しいご関係であったことがCDのジャケットで知った。「沼津の乗連寺という古い寺の住職とひよんな事から知り合い、その寺が経営している幼稚園でヒサモト先生にピアノを弾いてもらうという話を聞いた。ヒサモト先生とは、ピアニストの久元祐子だと知って驚いた。わがモーツァルト・コレクションに

CDだけでなく、モーツァルトのピアノ曲の演奏法をめぐる本もある。そんなプロが「ハトポップ」のピアノを弾いてくれるなんて...五年、十年とかかわり、構造の細部にいたるまで、眼と指先でたしかめた。繊細で、シャレた演奏ゲームの贈り物だ。わがコレクションにまた一つ、ステキな宝物が加わった。」池内先生の久元さんへの賛辞である。プロとしての実力が高いのに、けしてお高くとまらない久元さんのお人柄を見抜き、心動かされた池内先生のそんな優しい一面が垣間見られた。人間味あふれる、温かな心を持たれた人であった。旅と山が、そしてモーツァルトが好きな人であった。

「旅が好き 山も大すき 人も好き 細る
いのちのなんぞ哀しき」

(2012年2月7日、NHK 花壇)

最近、亡くなられた方でもうお一人、愛好会にとって掛け替えのない、忘れられない人がいる。Vnの岡山潔氏である。

今年10月1日杉並公会堂大ホールにて岡山潔メモリアル・コンサートが行われた。昨年10月1日、75歳で惜しまれながらこの世を去ったが、その一周忌にあたるこの日に、氏から教を受けた門下生を中心に追悼コンサートが、氏の生まれ育った地にある杉並公会堂で行われた。プログラムは氏の畏友である四戸世紀氏が加わったモーツァルトのクラリネット五重奏曲、氏の薫陶を受けた国内外で活躍されている山田和樹氏の指揮によるベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」などが演奏された。この曲は山田氏が芸大の3年生の時に立ち上げたオーケストラで、岡山先生がゲストとしてコンサートマスターを引き受けられ、演奏した思い出の曲とのこと。この「英雄」のリハーサルの時、岡山先生は「ここは暗譜しよう！」と言われたそうである。これが岡山氏の音楽に向き合う時の少しの妥協も許さない厳しい姿勢である。その時の張り詰めた思い出を胸に精魂込めて指揮をした

この日の「英雄」は、その思いが伝わってとても感動的な演奏で、思わず込み上げてきた。岡山潔氏は愛好会の例会で「岡山潔弦楽四重奏団」にVaの川崎和憲氏が加わって、五重奏曲を中心にした演奏を2度行っていた。第387回例会(2012年1月14日)と第411回例会(2014年1月16日)である。岡山潔弦楽四重奏団は、2009年に岡山潔氏が立ち上げ、他に奥様の服部芳子氏(Vn)、佐々木亮氏(Va)、河野文昭氏(Vc)がメンバーであった。岡山氏との出会いは、氏が25年にわたってプロモートされてきた山梨県、小淵沢で年1回の国内外の著名な演奏家による室内楽の祭典「リゾナーレ音楽祭」であり、何度か行って、直接、愛好会への出演を依頼して実現できたものである。卓越した演奏技術は言うに及ばず、氏の音楽に対する真摯な姿勢にはいつも敬服していた。

2011年にはご自宅に新進演奏家育成を目的としたスタジオ・コンチェルティーノを作り、毎月著名な演奏家や音楽学者を招いてセミナーや演奏会を行っている。今は芳子夫人が故人の遺志を引き継いでいる。そこに何度かお伺いし、その時偶然にPfの村田千佳さんと出会い、2度の愛好会出演に繋がった。不思議なご縁を感じる。

岡山潔氏は、特にモーツァルトがお好きで、モーツァルトの名前を冠にした「モーツァルト四重奏曲」を大学の仲間と立ち上げたほどだった。

岡山氏もまた人間的に温かみのある方で、演奏中はとても厳しいお顔だが、演奏していない時の優しい笑顔は忘れられない。

相次ぐ巨星の消失は誠に残念であるが、偉大な知識人や演奏家の皆さんに愛好会に出演していただいたことは、歴史と信用のある愛好会だからこそ実現できたことであり、会員の一人としてとても誇りに思う。そしてこの事実、愛好会の歴史にしっかり刻まれ、これからも燦然と輝き続けていくことであう。

(合掌)



わかったつもりの陥穽と深淵 その2

K.488 ガーディナー・イズミ

8. 身分を表す記号と近代への地殻変動

《フィガロの結婚》をはじめて聴いたとき、スザンナと伯爵夫人が服を交換して変装しただけで、どうして伯爵を騙せると考え、また騙せたのか、納得がいかなかった。そのときは、身分制が強固な社会では衣服が身分を象徴し、服装だけで人物を判断していたからだと考えた。当時は大まかに貴族、貴族の従者や新興のブルジョワ、それに農民や職人の3階層の身分は外見で簡単に識別できただろう。

マリア・テレジアの宮廷行事では、誰が、どのような服装で参内すべきか、そのつど細かく定められ、通達されていた。絶対王政の宮廷では服装と立ち居振る舞いが、宮中の職務と位階の階層秩序を、みんなが相互に確認することが重要だった。そうやって視覚化された階層秩序を、心に刻んだのである。一方で、1763年身分ごとに着用してよい服地や装身具を厳密に定めた服装規定が廃止された。以来オーストリアでは、誰もがそれぞれ好みの衣装を自由に身につけることが可能になっていた。1766年ヨーゼフ二世は、17世紀以来、宮廷におけるヨーロッパ共通の正装として用いられてきたスペイン風式服を、全面廃止した。映画『アマデウス』でも見られるように、皇帝は執務中軍服を着ている。仮面舞踏会では仮装の規定を無視し、宮廷儀典を公然と踏みにして、フロックコートや軍服を着て顔を出した。位階や慣例といった伝統に基づく貴族中心の宮廷制度では、時代の変化について行けないと考え、自ら伝統を打破する行動をとったのである。*1

アナール派歴史学の総帥フェルナン・ブローデルは、社会が安定した状態にあり、人びとの生活において、一切の空間的移動も質的

変化も生じないままであったなら、彼らの服装もまた、何世紀にもわたって同じ外観を示し続けるであろう、人間の服装に「流行」が生じるための、「モード」とよばれる概念が成立するためには、既成の政治秩序や社会制度、経済構造の転換があると指摘している。18世紀後半のウィーンは、伝統的身分制度そのものが揺らぎ始め、個人の衣服とその身分の結びつきも緩和し、貨幣経済の発展もあって、広い階層が服装に金をかけ、個性を主張するようになった。首都の服飾産業は急成長をとげた。私がプフベルクの商売を調べたとき、織物商というから当時普及しだした綿織物業だと考えたが、絹織物だった。そんな贅沢品を扱う商売がどうして繁盛したのかと考えたが、景気がよく、市民のあいだにモードを競う風潮が広がっていたのである。

《フィガロ》の観客は、衣服の交換で身分を識別し、納得したのだろうか。ウィーン市民はもはや服装で身分を識別しなくなっていたような気もするが、ウィーンの上流市民は貴族文化に憧れ、見習おうとしていたから身分制の風習や観念は残っていて、服装で人物を判断する劇の展開に同感していたかもしれない。あるいは、茶番とわかっていても演劇の決まり事だと納得したのかもしれない。当時の人がどんな感覚で受けとめたのか、現代人がいろいろ推測してもわからない。

《ドン・ジョヴァンニ》第2幕でジョヴァンニはレポレットと服を交換して変装する。ジョヴァンニはマゼットと農民たちが人違いするのをいいことに、軽くあしらう。この間違いも、服装で人を判断したせいだろうか。

私は《フィガロ》で身分制批判、《ドン・ジョヴァンニ》で自由の主張をくみ取ろうとして、それぞれの公演でどう描かれるか、こんなところに神経を注ぐ。

身分制批判は《ドン・ジョヴァンニ》にも引き継がれている。第1幕第20場、ドン・ジョヴァンニが農民を集めて開く舞踏会で、仮面とドミノを着けて登場するのはエルヴィー

ラ、ドンナ・アンナ、ドン・オッターヴィオの貴族だけである。仮面を着用すると身分を転倒した無礼講が許されるしきたりだが、マリア・テレジア治世の後半では謝肉祭の舞踏会での仮面着用は貴族のみに許された。身分制に従っているようだが、次が問題である。ジョヴァンニが「誰もかれもご自由に！(Viva la liberta!)」と叫ぶと、一同が唱和する。そして踊りが再開される。貴族のアンナとオッターヴィオは宮廷舞曲であるメヌエットを踊り、ドン・ジョヴァンニがツェルリーナを誘い、コントルダンスを踊り始める。コントルダンスは、英国農民のカントリー・ダンスが起源で、フランス宮廷を中心に大流行した舞曲なので、貴族と村娘のペアが踊るにふさわしい。レポレッコがマゼットを誘い、平民であるがゆえに通俗的なドイツ舞曲を踊る。3階級の人達が3種の舞曲を同時に踊り、しかも調和して一体化している。音楽が身分の違いを溶解し、自由万歳！と叫んでいるように聞こえる。誰もがしがらみから解き放たれた叫びか。海老沢敏訳では、「無礼講よ、万歳！」となっている。矮小化した訳のように感じる。

9. ウィーンの検閲のその後

ヨーゼフ二世は啓蒙主義を取り入れて、近代化に尽力した。しかし、1792年に即位したフランツ二世は、宰相メッテルニヒに統治を丸投げし、反動的政策を行った。メッテルニヒは秘密警察を駆使して、反体制の取り締まりに当たった。1811年以降、秘密警察がウィーンの最上位の検閲機関となった。メッテルニヒの側近ゼドルニツキー伯爵は1817年警察長官になると、この郊外劇場に警察官を派遣し目を光らせた。こうして警察長官自ら劇評の検閲をした。そうして、《ドン・ジョヴァンニ》のなかの合唱「自由万歳！」は削除され、「楽しさ万歳！」とされた。*2

この史実から、私はベートーヴェンの第九交響曲を思い出した。昔耳にしたことだが、「歓喜に寄す」はシラーの詩をベートーヴェンが自在に変更して、第4楽章にした。その

とき、検閲を恐れて原作の自由 Freiheit を喜び Freude に変更した。そのせいか、第九の「歓喜」は空疎な感じがすると思っていた。調べてみたら、これはとんだ間違いで、シラー自身が後年穏健になって、官憲の目を逃れるために、自由を歓喜に修正したという。ベートーヴェン自身も官憲の追求をおそれ、初演の地をベルリンにしようとした、と記憶していた。これも当時ウィーンで大当たりのロッシーニの影響で、ウィーンでは評判を取れないと本人が考えたせいだともいわれる。

私はベートーヴェンのことは知らない。それはいいとして、モーツァルトのこともウィーンのことも、わかっているつもりが、何もわかっていないことばかりである。

<注>

*1 山内克子『ハプスブルクの文化革命』

*2 菊池良生『検閲帝国ハプスブルク』



『アマデウス通信』No.53の訂正記事

乗松昭さん「フェルメール展 9/35」

に誤りがありましたので、訂正致します。

p.8 (誤) 真珠の首飾りの少女

(正) 真珠の耳飾りの少女



▽祝創立40周年“ちょっとひと言”にたくさんのメッセージをお寄せいただきありがとうございます。皆さんのモーツァルトへの

思いが率直に語られ、ワープロ入力をしながら、心を揺さぶられていました。▽40周年も、会員から会員へのリレーで成り立っています。本誌でも「Talk おしゃべり」のリレーが始まりました。継続してゆくこと期待します。▽12月例会(第482回)は小倉貴久子さんのコンサートでした。フォルテピアノの協奏曲で、ベートーヴェンの第4番からモーツァルトの第20番を当時のウィーンの聴衆の耳で聴きました。21世紀の演奏とは別な曲を聴いたようで大満足でした。(ガーディナー・イズミ)